

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

地域力を育む教育

88

2016 November

地域力を育む教育

3 視点 地域を引っ張る人材育成 島根県中山間地域研究センター研究統括監、島根県立大学連携大学院教授 藤山浩

6 豊かな森で育った園児が山里の未来を創る 森のようちえん「まるたんぼう」(鳥取県智頭町)

8 三つのチャレンジの連鎖でふるさとへの愛着を育む 子ども×若者×大人チャレンジ(島根県雲南市)

10 島に帰ってくるための基盤をつくるキャリア教育 株式会社ジブノンオト(山口県周防大島町)

12 体験型プログラムを通じて世代を超えた人のつながりを生む 山陽子どもアイランド(岡山県赤磐市)

14 「地域に生きる企業家群像」88 両備グループ 代表兼CEO 小嶋光信(岡山市)

18 「キラリ、輝く元気企業」61 独自の管理方式を用い、従業員一丸で生産性向上に励むカワト.T.P.C.(山口県岩国市)

20 「夢紡人/ゆめつむぎびと」84 伝統的な技法にこだわりながら新しい長浜人形を創作する土人形作家福美さん(島根県浜田市)

23 「この名酒にこの一品」11 純米吟醸山田錦50貴 あじの南蛮漬(山口県宇部市)

24 「近現代芸術再発見」4 松田正平(島根県生まれ)「1913-2004」

26 「癒やしの湯めぐり紀」5 きのお温泉(広島県大崎上島町)

28 「国宝の旅」23 浄土寺本堂・多宝塔(広島県尾道市)

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていって媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

碧い風

あおいかぜ
88
2016 November
contents



地域力を育む教育

視点

地域を引っ張る人材育成

島根県中山間地域研究センター研究統括監
島根県立大学連携大学院教授

藤山浩

「地元を創り直す時代」

人材を語るには、時代を語らなければならぬ。人は、時代の波に揺られることもあるが、新たな時代の波を創り出す主役でもあるからだ。

この二〇一〇年代、高度経済成長期以来の社会や経済の仕組み全体が、同時多発的な持続性危機に直面している。まず、一九六〇年代以降、人口流出が続いてきた中山間地域では、最後に残った「昭和一ケタ世代」の引退局面が訪れている。次世代の取り戻しに失敗すれば、農林業の存続危機はもたらさる。集落自体の消滅さえ懸念される状況である。



同じく一九六〇年代以降、中山間地域から大量の人口流入が続いてきた都市においても、

「団塊世代」が全員高齢者になったことを契機に、大規模に造成された郊外団地から前代未聞の地域一斉高齢化が起きている。そして、二〇二二(平成三十三)年に起こった東日本大震災は、あまりにも特定の地域に人口や産業を集中させた集中型国土の限界を、まざまざと知らしめた。また、そうした都市集中を支えてきた地球規模の資源やエネルギーの大量消費により、地球温暖化をはじめ、地球環境全体が限界に達してきている。このように、「規模の経済」による集中原理により、ひたすら右肩上がりの成長を目指してきた社会のシステムは、「二周目」の前半は華々しくとも、「二周目」が展望できない根源的な限界を迎えている。中山間地域や郊外団地などを次々と高齢化させて「使い捨て」ていく——次はマンションの「使い捨て」に向かうであろう!——文明のあり方を卒業するときに来ている。ただ、信じられないことに、中高年の男性を中心に、いまだに「成長幻想」にとらわれている人がいる。生態系全体を見渡しても、無限の成長を続けている生物種はいない。それは、ガン細胞と同じく、その種だけでなく、生態系全体にとっても破滅を意味するから

だ。長い目で持続可能性を考えると、私たちは、自然と共生する循環型社会に向かうしかない。外からの資源やエネルギーあるいは資金の集中的投入によって、つかの間の高度成長を夢見るのではなく、地域内の多様な人材や資源を組み合わせて循環させ、そこに安定して住み続けていくことのできる地元を創り直す時代なのである。 「追い出す教育」「独り勝ちの教育」からの卒業 このような時代認識に立つとき、二〇一〇年代における人材育成のあり方が、過去の延長線上にはないことは明らかだ。多くの中山間地域において、都市の成長を前提として、いまだに地元から「追い出す教育」が続けられていないだろうか。今や大半の人々が暮らす都市において、「今だけ、自分だけ、お金だけ」の短絡的な欲望と開き直りを超える価値観を生み出し、共有できているだろうか。地域社会においても地球規模においても、独り勝ちを狙う蹴落とし合いの中で成長のバイを奪い合うのではなく、限られた社会や環境の中で多様な共生を磨き合う可能性に目を開いていくだろうか。 このような従来型の教育のあり方へ

●目次写真提供: NPO法人智頭町森のようちえん まるたんぼう、雲南市、林田 悟、高野 淳
●表紙デザイン: 久原 大樹(広島市在住)

*本誌は環境に配慮した用紙を使用しています。



筆者の集落の秋祭り。手間をかけたものしか伝わらない。地元は一人一人の生きた姿を記憶し、未来へつなげるところ

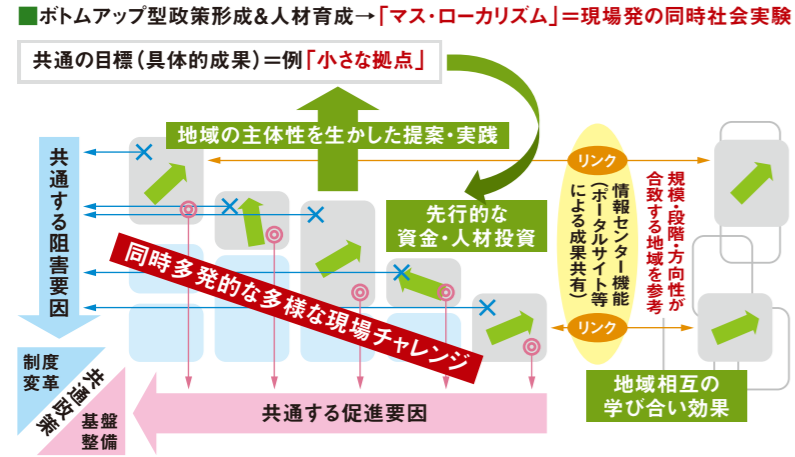
の疑念が高まる中、今、中国地域では、さまざまな地域に根差した新しい教育の試みが始まっている。

鳥取県智頭町で始まった「森のようちえん」の取り組みは、瞬く間に全国各地へ飛び火して、新たな移住者まで呼び込むうねりを呼んでいる。自然と幼児に宿っている「生きる力」を信じ、出合わせる場所に、その魅力があると感じる。

鳥根の離島や中山間地域の高校は、学校の存続をかけて、地元の底力を引き出す教育に挑戦している。全国からの留学生は、二百名を超え、平成十八年度は、二十六年ぶりに県全体の高校生が増加に転じた（前年比百七十二

これからの持続可能な地元を創り直す営みは、地域同士が磨き合う「リーグ戦」で進めていくのではない。人間と同じように、一つ一つ違う地域の課題解決には、全国統一の処方箋などはない。確立された正解がない取り組みを進める上で、地域の人々が求めていることは、また地域の人々を勇気づけるものは、自分たちと同じような地域がどのようなにがんばっているかという事実なのである。

ダイヤモンドは、何で磨いているのだろうか。地上で最も硬い物質、ダイヤモンド



名増)。トップランナーの隠岐島前高校では、愛唱歌「ふるさと」を、従来の「志を果たして」ではなく「志を果たしに」と代えた四番の歌詞をつくり、歌っている。

中国地域五県の大学においても、文部科学省の「地(知)の拠点」事業に応募し、「全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献」への取り組みが進んでいる。まだまだ文部科学省に向けてのアーパイづくり的な活動も目立つが、これまで地方大学であっても都市志向の学問や研究が多かったことを考えると、大きな進歩といえるだろう。

このような「地域力」を掘り起こす教育の流れを確固たるものとするためにも、地元を創り直す時代における人材育成に関わる三つの転換軸を提案したいと思う。

「個別最適」から「全体最適」へ

社会全体でできるだけ早く大きな成長が求められる時代においては、分野ごとの「縦割り」で分業し、「規模の経済」を阻むボトルネックを解消することが有効な方法だった。分野ごとの規模拡大と社会全体の規模拡大がシンクロし、相乗効果が生まれていたのである。

例えば、施設整備にしても、それぞ

ヤモンドは、ダイヤモンド同士で磨くしかないのだ（実際にダイヤモンドの粉で磨いている）。同じように、地域を磨いて高めるものは、他の地域に他ならない。そうした地域同士の磨き合いの中でこそ、本当の人材育成が進んでいくのである。

私たちは、市町村の中でも県の中でも中国地域の中でもそして全国的にも国際的にも、がんばっているあるいはがんばろうとする地域同士が情報を共有し、地域づくりの人材同士が交流できる拠点やシステムを体系的に整備していかなければならない。行政や大学の中から正解が生まれてくるわけではない。そうした学び合い、磨き合いの中から、自らの地域に合った解決策を見だしていくのである。

このような地域同士の学び合い・磨き合いの重層的な「リーグ戦」が形成されれば、数多くの成功・失敗の背景が共有されるようになる。そうした共通の成功要因・失敗要因を現場から漉き取って、県や国の基盤的な政策としていけばよいのである。こうした地域現場での同時多発的な社会実験を先行させ、ボトムアップ型で真に現場に役立つ地域政策の形成を行うプロセスは、「マス・ローカリズム」と呼ばれ、イギリスで近年注目されている。

この分野ごとに立派な専門的施設を個別につくってきた。右肩上がりの成長の時代には、たくさん揃えるだけの資金や資源がまだあったのだ。しかし、低成長時代となり、人口も減り始める、あちこちにバラバラで施設が点在する状態は、決して地域全体として望ましいものではなくなった。それぞれの施設ごとに維持管理のコストがかさみ、数多くのバス路線で結ぶといった移動のコストも軽視できない。むしろ、一つの建物の中に複数の分野の機能をコンパクトにまとめ、横断的に運営した方が地域住民にとっても行政側にとっても得策で持続可能となる。

現在、地方創生の取り組みでは、中山間地域対策として、小学校区や公民館区といった一次生活圏ごとに地域住民を主体として「小さな拠点」を形成することが重視されている。「小さな拠点」は、分野ごとにバラバラの運営では立ち行かない拠点や交通の課題に鑑み、分野間を柔らかくつないだ「合わせ技」で新たな持続性を創り出そうとする仕組みづくりなのである。

このような分野別の量的拡大ではなく分野を横断した「新結合」が求められる時代においては、各分野の「個別最適」を追求する専門家にとどまらず、各分野を広く見渡した上で「全体最適」

私は、地方ブロックごとに、この「マス・ローカリズム」手法により、ネットワーク型で地域づくり支援や人材育成を行う連合大学院の設立を提唱したいと思う。そこは、全国的なチャンピオンズリーグもネットワークされるとともに、明日の地域づくりを目指すアジアやアフリカの若者たちとインターローカルな学び合い、磨き合いの拠点としても進化するだろう。

「今だけ」から「世代を超えて」へ

地域づくりにおいて、最も難しくそして最も大切な人材育成は、自分の死んだ後のことを考える人材をそれぞれの地元で育てることである。

私が暮らす集落でも、最近、お葬式が増えてきた。組内のみんなが集まるから、自然と「あのおじいちゃんがいとおばあちゃんはいつも丹念にこうしていた」といった話になる。

私たちの地元は、今生きている世代だけでなく、自分たちが死んだ後のことも考えてがんばってきた幾代もの努力で、今の姿になっている。おそらく自分一代のためなら、そこまで立派な橋や石垣、蔵を造らなくてもよかったはずだろう。しかし、そうした目先の

を創出するマネージャー的人材が重要な役割を担う。問題は、大学までの教育にせよ、地域現場の組織体系にせよ、支援する行政側の組織にせよ、人材の育成や働き方が分野「縦割り」で規定されていることだ。

現場組織におけるマネージャー人材のポジション創設と適切な処遇、行政組織における分野を横断したコーディネート的人材のキャリアアップ整備、この両者を念頭にいた大学・大学院における分野横断型の地域マネジメント学部やコースの創設、三つセットで進めたいものだ。

「トーナメント」から「リーグ戦」へ

地域づくりは、独り勝ちを目指すものではない。また、それぞれ異なる個性を持つ地域同士が、同じ目標や同じやり方でしを削ることも、間違っている。国全体としてトップダウンで政策目標を掲げ、画一的な手法で地域現場に広めていくやり方は、近代的インフラ等を全国に普及させていくときには有効だったかもしれないが、もはや時代遅れである。地域づくりを、中央からの補助金欲しさにお互い蹴落とし合う「トーナメント」の場にしてはならない。

利益を超えて高い志を込めた人の記憶は、世代を超えていく。そうした記憶が、「今だけ、自分だけ、お金だけ」に傾きがちな私たちの背筋を、今も少し伸ばしてくれる。

それぞれの地元がだんだんと良くなるとすれば、それは、この世代を超えた記憶のリレーが繋がっているからに他ならない。そこに、近道はないのである。人材育成はとかく若者に目を向けがちだが、まずは、中高年が、自分の代だけの欲得や逃げ切りを図らず、次の世代の記憶に残り得る志を示すことが、最高の人材育成となる。私も含めて、中高年の方々、地元でもうひとがんばりしましょう。あなたの背中を次の世代が見てくれているはずだ。

タワーマンションブームの昨今だが、人々ががんばった記憶が心にも風景にも刻み込まれていく地域と社会にした

【参考文献】
藤山 浩『田園回帰1%戦略～地元の人と仕事をとり戻す』(農文協、2015年)

profile
藤山 浩(ふじやま・こう)
1959年鳥根県益田市生まれ。一橋大学経済学部卒業。博士(マネジメント)。国土交通省国土政策局「国土審議会計画推進部会」住み続けられる国土専門委員会委員他、国・県委員多数。専門は、中山間地域論、地域マネジメント、地域人口分析、地域経済論。

地域力を育む教育

豊かな森で育つた園児が 山里の未来を創る

森のようちえん「まるたんぼう」《鳥取県智頭町》

総面積の九割以上を山林が占め、「慶長杉」と呼ばれる樹齢三百年以上の人工林が残るツギのまち、鳥取県智頭町。その豊かな自然を舞台に、これまでにない保育が進められている。森のようちえん「まるたんぼう」だ。子どもの自主性を尊重した保育が特徴で、その理念に共感した子育て世代の移住により、山里に新しい風が吹き始めている。



森には子どもたちに必要なものが何でもある



週1回「お料理の日」にはみんなで昼ご飯をつくる

「園舎は智頭の森と里山

智頭町の森のようちえん「まるたんぼう」の保育は、町内に点在する森の中や里山など十四カ所のフィールドで行われている。春は桜や新緑の下でお弁当を食べ、夏は清冽な溪流で遊び、秋は落ち葉のふとんに潜り、冬は雪遊びに熱中する。四季折々にさまざまな貌をみせる智頭の森や里山には、園児を夢中にさせないものなど何一つない。雨の日の水溜まりでさえ、園児には格好の遊び場となる。

「雨になろうが、雪が積もろうが、とにかく自然の中で過ごすことが最大の特徴です。しかも、その日、どこへ行くかは園児たちに決めてもらいます」
同園を立ち上げた代表の西村早栄子さんはそう語って、笑顔をみせた。
園の一日は午前九時に始まる。街中の集合場所に園児が集まると、保育スタッフがどこへ行きたいかを尋ねる。

「智頭の森に魅せられ移住

「まるたんぼう」は、「森を感じるところで暮らし、子育てをしたい」という西村さんの思いから始まった。東京出身の西村さんは、鳥取県庁の農林技師となった夫と鳥取市で生活。その後、自らも県の農林技師となって二〇〇三

(平成十五)年に智頭町を管轄する八頭総合事務所に赴任した。智頭の森に心を奪われた西村夫妻は、ここで子育てしようと決意し、十年前に智頭町に移住した。
「デンマークで始まった森のようちえんの話の本で読んでいたので、そんな取り組みが智頭でもできたらいいなと漠然と思っていました」と西村さん。

移住した西村家の斜め前には、同じ世代で子育て中の熊谷京子さん夫妻がいた。
「京ちゃんは三人の男児をワイルドに育てており、その育児に感心するとともに意気投合するようになりました。森のようちえんの話をすると、熊谷家も共感し、二家族から夢をふくらませるようになったのです」
その夢が実現に動き出したきっかけ



フィールドの1つ、中原のふれあい夢来



5月には田植え前の田んぼで泥遊び



命の源の土。実りを迎える喜びを知ってほしい

は、智頭町の人材育成塾に西村さんが参加したことであった。森のようちえんを提案すると智頭町民も興味を示し、勉強会が生まれた。先進事例の話を聞く中で火がついた西村さんたちは、二〇〇八(平成二十)年三月から「まるたんぼう」の前身となる月一回の「森のおさんぽ会」を始めた。さらに、町民によるまちづくり組織として智頭町が設置した「百人委員会」で提案したところ採択され、二〇〇九(平成二十二年)四月に「まるたんぼう」を開園したのである。毎日通うのは二人だけで、週二回通園などを合わせても十二人の園児による小さな始まりであった。
「それでも智頭町は、保育士一人分の人件費を予算化してくれました。また保育の場となる私有林への立ち入りを集落などにお願したところ、快く応じ

てもらえたうえ、子どもたちがけがをしないようにと朽ちた橋を架け替えてくれたところもありました。子育てに寄せる町と地域の期待を痛感しました」と西村さん。保育の方針や内容は、デンマークやドイツの取り組みを参考にしながら、自分たちで考えた話です。

「希望に応じて二園目を開園

次年度は毎日通園のみにして十三人を受け入れた。三年目は二十一人になり、四年目には三十五人に達した。五年目以降は、三歳児から五歳児を対象に定員三十人で進めている。メディアで紹介されたこともあって、毎年定員を上回る応募がある。近隣からの通園だけでなく移住してくる家庭もあり、これまでに二十五世帯、百人以上が智頭で暮らすようになった。鳥取市から通う園児を対象に通園バスも運行している。これは智頭町と鳥取県の支援制度で実現したものだ。
二〇一三(平成二十五)年四月には二園目となる「すぎほっくり」を開園した。定員は十八人で、熊谷さんが園の代表を務めている。

「定員を超過したからといって、希望に沿えないのはつらい。そこで、保護者のサポートもお願いし、よりアットホームな形の森のようちえんを立ち上げま

した」と話す西村さんは、地域住民との交流も深めながら、智頭でしかできないことを体験させてあげたいと強調する。そして、「豊かな自然で生まれ育った魚が、海で大きく成長して再び故郷の川に遡ってくるように、智頭で育つ子どもがここを誇りに思い、将来、子育ての場として智頭を選んでもらえれば」と願いを口にした。

豊かな森が子どもたちを輝かせ、その子どもたちが山里のまちと森を照らす光になる。通園させる家族や保育スタッフ、地域住民の温かい眼差しを一身に受けた園児たちは、今日も智頭の森に元気な声を響かせている。



まるたんぼうハウス



森のようちえん「まるたんぼう」代表の西村早栄子さん

地域力を育む教育

三つのチャレンジの連鎖で ふるさとへの愛着を育む

子ども×若者×大人チャレンジ 〈島根県雲南市〉

人口の社会増に挑んでいる島根県雲南市は、「子ども×若者×大人チャレンジ」プロジェクトを推進している。保幼小中高一貫した「キャリア教育」と若手人材を掘り起こす「幸雲南塾（大人版）」、地域自ら課題解決を図る「地域自主組織」の三つのチャレンジの連鎖によって、持続可能な地域社会を築くのがねらいだ。



大学生の協力の下、目標達成のプロセスを学ぶ「幸雲南塾」



「若者チャレンジ」の核事業として開催している「幸雲南塾（大人版）」



「桜まつり」で実現した若者チャレンジプロジェクト演劇部による公演は大盛況

住民主体で地域課題解決

雲南市は中山間地の六町村が合併し、二〇〇四（平成十六）年十一月一日に誕生した。五百五十三平方キロメートルの広大な市域を持ち、人口は合併時の約四万五千人から減少し続けて現在約四万人。高齢化率は三十六%を超え、既に二十五年先の日本とほぼ同じ水準に達している。

「まさに高齢化社会のトップランナー。社会動態による人口減少に歯止めをかけるため、若い世代の定着と呼び込みを図ることが喫緊の課題となつています」と雲南市政推進課の野々村一彦さんは話す。

そのため、地方創生の重点戦略として打ち出したのが、「子ども×若者×大人チャレンジ」の連鎖による持続可能な地域づくりである。

まず、合併次年度から開始した、おむね小学校区単位で住民自ら結成し

に触れながら学習意欲を高めたり目標達成のプロセスを学んだりする、「中学生の！幸雲南塾」だ。また、高校生が大学生や若手社会人から地域課題を学び、まちづくりを実践する「若者会議」や、中学・高校生が地域の若者や大学生などと語り合つて自らの将来を描く「カタリ場授業」などを実施している。昨年六月には、統合された旧温泉小学校の校舎を活用してキャリア教育推進施設「おんせんキャンパス」を開設した。「働く意義ややりたい自分を考えていく中で社会や地域の課題に向き合うようになれば、それを乗り越えようとする意欲が芽生えます。また、地域で活動している大人や若者の姿に触れることでまちの良さを知り、ふるさとへの誇りと愛着が育まれる。そのようなキャリア教育の場を提供したいと活動しています」と「カタリバ」職員で社会教育コーディネーターを務める生田裕規さんと池田隆史さんは口をそろえる。

雲南市では約千九百人の小学生と約千百人の中学生が学ぶ。高校は分校を含めて三校あるが、中学生の三十五%は市外の高校へ入学し、大学進学や就職では多くが県外へ流出する。その流れを、「外へ出て学ぶことも必要」との認識を示した上で福島さんは、「雲南をフィールドにした学びと自分を応援し

た地域づくり組織「地域自主組織」による活動を「大人チャレンジ」と位置づけ、住民主体で地域課題の解決に努めている。地域自主組織は、自治会をはじめ地域内の多様な団体と多世代の住民による新たな地縁組織で、市全域で三十組織が活発な活動を展開。無店舗地区でのスーパーマーケットの開設、運営や産直市の開催、地域ぐるみの子育て支援、宿泊型体験施設での交流活動などさまざまな成果が現れている。

キラキラ輝く若者を育成

「大人チャレンジ」とともに、地域課題の解決に向け進めているのが「若者チャレンジ」だ。その核として二〇一一年（平成二十三年）に、社会起業や地域貢献を志す人材を発掘・育成する「幸雲南塾（大人版）」を第一期生十三人でスタート。起業家や地域プロデューサーなどから話を聞き、地域資源を活用した起業や地域活性化のプランを立案・実行する約八カ月間のプログラムに取り組んだ。第二期卒業後の二〇一三年（平成二十五年）四月には、塾生が中心となって「おうちラボ」を結成した。翌年四月にNPO法人化し、塾生や雲南市在住・出身者、インターン生などがメンバーとなって「幸雲南塾」の運営や若者の地域活動をサポートする中間支

てくれる大人との関わりがあれば、都会で学び、働いたとしても雲南に思いを馳せ、また戻ってきてくれるはずだ。インターンも含め、若者が集まれば面白いまちになり、地域自主組織も活発化します。そんな好循環が目標」と強調する。チャレンジの連鎖によって雲南市は、持続可能な地域づくりのトップランナーに変貌しようとしている。



キャリア教育推進施設の「おんせんキャンパス」

後列左から「カタリバ」の池田隆史さんと生田裕規さん、前列左から「おうちラボ」の小俣健三郎さん、平井佑佳さん、上野奈苗さん、後列右から雲南市の野々村一彦さん、福島勇樹さん



援組織として活動している。

「雲南のまちをチャレンジ精神に満ちたキラキラ輝く若者でいっぱいにする」とが塾の目指しているところです。塾生は二十〜三十代が中心で、昨年までの五年間に延べ六十六人が卒業。活発な活動でまちに元気をもたらしています」と、東京からインターンして「おうちラボ」の事務局長を務めている小俣健三郎さんは笑顔で語る。

塾を通じて、若者向けカフェの開設や地域自主組織との連携などの成果が生まれている。昨年の第五期の塾からは訪問看護ステーションが誕生し、株式会社化して在宅医療空白地域の看護



高校生による「若者会議」のプランを「桜まつり」で実行

具体的には、学校や地域にキャリア教育を支援するコーディネーターを配置し、幼児期から高校までの発達段階に応じた市独自のキャリア教育実践プログラム（「夢」発見プログラム）に基づき、放課後や土曜日なども活用したキャリア教育を推進している。その一つが、大学生の協力の下で多様な価値観

島に帰ってくるための 基盤をつくるキャリア教育

株式会社ジブノオト 《山口県周防大島町》

温暖な気候に恵まれ、風光明媚な景色が広がる周防大島。この五十年で島の人口は三分の一に減り、高齢化率は約五十%に達するなど過疎化・高齢化が急激に進んだ。しかし近年は子育て世代の移住や起業が増え、新たな活気が生まれている。そうした動きに同調するように、「島に帰ってくるための基盤をつくるキャリア教育」が推進されている。



小中学生のキャリア教育キャンプ「サマーキャリアスクール」



SETOUCHI留学でハワイ移民の話に聞き入る中高生



英語でカヌーのレッスンを受ける

島で仕事を生み出すための スキルやマインドを育む

文部科学省は平成二十八年度から「小・中学校等における起業体験推進事業」を開始した。これは、会社設立・商品開発、販売、決算といった起業の模擬体験を通じて、チャレンジ精神や新しい価値を創造する力を育成する取り組みで、全国への普及に向け、現在はモデル校として山口県で選定されたのが、周防大島町立城山小学校、同町立東和中学校、山口県立周防大島高等学校の三校である。

東和中学校では、5年前から、道の駅で販売実習をするアントレプレナーシップ教育を進めてきた。その授業をコーディネートしているのが、キャリア教育デザイナーで、株式会社ジブノオト代表の大野圭司さん。大野さんは、町教育委員会のコミュニティ・スクール・

スーパーバイザーとして、町内の小中学校で年間百時間以上の総合的な学習の時間のカリキュラムづくりに携わっている。

周防大島で育った大野さんは、十五歳のときに将来島おこしをすることを決意した。島のランドデザインを描くべく、大阪芸術大学でランドスケープを学んだ後、東京・大阪で数年働き、Uターン後二〇一三（平成二十五）年に会社を設立した。島おこしのためになぜ教育が重要なのか。教育に行き着いた背景には自らの経験があった。

「自分の同級生で島に戻ったのは約二割。島を出た友人たちはみんな『島は好きだけど仕事がない』と言います。それもそのはずで、これまでふるさと教育はあっても、この島で仕事を生み出すためのスキルやマインドを育てる教育がありませんでした。地元の間人が魂を込めてふるさとへの思いや誇り、地域での生き方を伝えて、子どもたちに当事者意識を持ってもらわないと、若者の流出が止まらないと思ったのです」

事業やお金の流れを学び 株主を募集し資金を集める

東和中学校のアントレプレナーシップ教育では、二年生のときに道の駅を

人と呼び込むコンテンツにもなりつつある。

JTB中国四国では、中高生を対象とした「次世代教育クルーズSETOUCHI留学」を二〇一五（平成二十七）年から実施している。SETOUCHI留学は、中高生約三十名と留学生リーダーが英語でコミュニケーションをとりながら行動を共にし、さまざまなアクティビティに参加する二泊三日のプログラムである。今年度はジブノオトがプログラムコーディネーターとなり、日本ハワイ移民資料館への訪問や片添ヶ浜でのカヌー体験のほか、島の活性化プランを考え、英語でプレゼンテーションするプログラムも盛り込まれた。英語を使いながらプロジェクト



大学について大学生と語り合う進路イベント「カタルンパ」(山口県立光丘高等学校)

「卒業生の中には、スペインに留学してバレンシアアオレンジを研究し、この島でかんきつ類のビジネスを立ち上げたという子や、障がい者支援のNPOをつくりたいという子がいました。授業を受けたことで、自分はどうなことをやりたいのかに気づき、そしてそれは実現することができるといふ自信をつけたようです」

**教育をコンテンツに
人と呼び込む**

周防大島における教育は、島外の



東和中学校のアントレプレナーシップ教育での株主募集参観日



ジブノオト代表の大野圭司さん

「豊かな自然やハワイ移民の歴史、UIターン起業家など島の強みを生かし、体験を通じた学びの場を提供していきたいですね。目指すは、『学びのリゾー』です」

教育を島の産業にしたいと大野さんは夢を語る。キャリア教育を通じ、ふるさとへの誇りを持った子どもたちが戻ってきたとき、島にどんな可能性が生まれるか楽しみだ。

体験型プログラムを通じて 世代を超えた人のつながりを生む

山陽子どもアイランド 〈岡山県赤磐市〉

団地内の公民館が主体となり、地域住民や、学校、保護者、教育機関が連携し、子どもが健やかに育つ環境づくりを推進する「山陽子どもアイランド」。地域の自然や人との交流によって、世代を超えたつながりが生まれている。



団地が遠望できるかぶと岩に山登り



異年齢の子どもで協力し合うジャンボドミノたおし

公民館を拠点に地域住民と子どもたちが交流

岡山市中心部から約十五キロの距離にある赤磐市の山陽団地は、高度経済成長期の昭和四十年代に開発された新興住宅地である。当時県内随一の規模を誇り、二千戸に約八千人の住民が住んでいた。しかし、他地域と同じく、約四十年が経過して少子高齢化が顕著になっている。児童数もピーク時の千四百人から二百人までに減少した。

こうした中、地域内の山陽公民館の館長や職員が発起人となり、地域住民八名によって「山陽子どもアイランド」が二〇一三（平成二十五）年に設立された。住民との交流を通じて、子どもたちが健全に育つ居場所をつくりたいという山陽西小学校と、地域住民の憩いの場という役割を持つ山陽公民館の双方の考えが一致し、公民館を拠点とした放課後子ども教室を開始した。



みんなで作る10mの長巻き寿司

翌年度からは土曜日の教育支援事業となり、五月から三月までの第二・四土曜日を中心に、年間約二十回の週末子ども教室を開催。「かぶと岩に登ろう」「砂川で遊ぼう」など自然の中で遊ぶプログラムから、「ペットボトルロケットを飛ばそう」「連風」などのものづくり、畑で玉ねぎやサツマイモを植えたり、地元企業を訪問したりと、幅広いプログラムが考えられている。

「地域にある自然や資源、人材、企業を活用しようというのがコンセプトです。近くの川や山を探検したり、地域の自然保護員やスポーツ指導員に協力してもらったりと、活動を通じて地域にこんな資源があり、こんな人がいるんだと知ってもらうことも大切になっています」と設立者の一人の塚田克仁さんは話す。

各プログラムは、設立者である役員がそれぞれ得意なテーマを担当して指導し、地域住民や高校生もボランティアランドに参加してくれていた子が訪ねて来てくれたりと、地域のつながりが少しずつ増えてきています。人と人のつながりや交流を大切にしている地域は、子どもの学力やお年寄りの健康にも効果が出ています。つながりをつくることは、まさにソーシャルキャピタル（社会関係資本）の蓄積だと思えます」（吉田さん）

地縁の深い中山間地域や島しょ部に比べ、市街地や住宅地はふるさとへの意識が希薄になる傾向があるが、郷土への愛着や共に過ごした人々への思いを育むことは、どんな地域にとっても、重要になってきている。

通学合宿の中で、特に地域の人との接点になっているのが「もらい湯」だ。地域の家庭のお風呂を子どもたちが借りるものだが、この交流によって、まちで出会ったときに、「おじさん、あの時ありがとう」「また家においで」と自然な会話が生まれているという。

「われわれが子どものころは、『あの子はどの家の子』と地域の大人はみんな分かっていましたし、人間関係がしっかりとしてきていました。大人と子どもとの関係が途切れてしまった今、楽しい遊びや学びを通じて、互いに顔見知りになることがまず大切だと思います」と設立者の一人の吉田博行さんは話す。

団地をふるさとに

昭和五十年代は、団地の運動会やお祭りなど、地域の活動が非常に活発だった。その行事も現在ではかろうじて夏祭りが残るのみ。住民の平均年齢も六十歳代と高齢化が進んでいる。

山陽子どもアイランドだけで地域の活性化を図ることは難しいが、子どもたちが団地をふるさとと思ってもらうことが将来に向けた第一歩だと考えている。

「活動を始めたことで『アイランドのおじちゃん』と手を振ってくれる子が増えました。また祭りのときなどに、ア



「ペットボトルロケットを飛ばそう」

アスタッフとして加わって、活動を見守る。ナイフや包丁など道具を使うときは、怪我をしないように安全な使い方をしっかりと子どもたちに教え、川や山に出かける際は、事前に何度も下見を行う。「危険だから使わせない、出せない」のではなく、「どうやったら安全に使えるか、遊べるか」を教え込むことが大事だという。

また、異年齢の子どもが触れ合えることもこの活動の特徴だ。「ドミノたおし」は、異学年混合チームに分かれ、オリジナルの五色のドミノを並べていくもの。ドミノは標準のものよりも大きくつくられているため、低学年の子でも気軽に参加でき、普段接することが少ない高学年の子と協働する機会になっている。参加した子どもたちからは「とても楽しかった」「片づけも面白かった」と好評で、ボランティアや高校生からも「子どもたちはよく考えて作っていて、発想がすばらしい」という感想があり、山陽子どもアイランドの名物プログラムとなりつつある。

交流を通して 顔見知りが増える喜び

また、二〇一四（平成二十六）年には、



地域の人との接点となる「もらい湯」

後列左から木村和昭館長、設立者の内田金一さん、吉田博行さん、前列左から石戸元さん、塚田克仁さん、高木唱洋さん



良き思想は、なまゆるらなやう

両備グループ 代表兼CEO 小嶋 光信 《岡山市》

たま駅長が救った鉄道

和歌山電鐵に生まれ変わった貴志川線のオープンの日、セレモニー後に猫を抱えた女性が追いかけてきた。「この猫の住まいを駅舎においてほしい」貴志駅の隣の売店の猫だったが、すみかが公道に置かれているため撤去するように言い渡されたという。その三毛猫を駅舎においてあげるには、駅を利用されるお客さまや従業員にとっても、駅舎に飼い猫がいることに納得できる理由が要る。

「この子を貴志駅の駅長にしよう」

名前はたま駅長。猫が駅長を務める駅のニュースは全国に広がり、貴志川線は、その愛くるしいたまの不思議な魅力によって、訪れるお客さまが増えた。駅長帽子を被ったたま駅長を抱える企業家の姿をテレビや新聞で見かけた人も多いだろう。両備グループの小嶋光信代表兼CEOである。「あれは本当にすごい偶然だったね」と奇跡のような出会いを振り返る。

民を救うのが経済

東京・麻布生まれの小嶋代表は、祖父、父が共に実業家という家庭で育った。事業を通じて世の中に貢献しようとする父の姿を見て、幼いころから将来何

か事業をしようとはのかに考えていた。

「父は、人間としてどう生きていくかを示してくれた模範的な人。仕事も家庭も大事にしていることを子どもに感じとっていました」

実業家になることを意識し始めたのは、小学校のころ。本の中に登場した福沢諭吉のエピソードを読み、慶應義塾を創設し、日本経済に貢献してきたその人間性に興味を持った。三田にある慶應義塾中等部を見に行くと、目に映ったのは男女共にはつらつと過ごす学生の姿。この学校に行きたいという思いが自然と芽生えた。

入学後は図書館で本を読みあさった。その中で出会ったのは「経済」の由来となる「経世済民」という言葉だ。世を治め、民を苦しみから救う――。この言葉に感動し、経済を志すことを決めた。

大学では、すでに「再生人」の片鱗を見せていたようだ。「慶應プロGRESS研究会」では、中等部の生徒を対象にした家庭教師派遣業を手掛けた。DやEの低い成績をAまで引き上げ、それが実現できなければ指導料は受け取らないという大胆なもの。結果、ほぼ全員がAの成績を収めた。「私は火中の栗を拾うのが得意なんです」と小嶋代表は笑う。

銀行を経て両備運輸に入社

大学卒業後は、三井銀行（現・三井住友銀行）に就職した。入行を決めたのは、経営を志すのにさまざまな仕事を知りたいという思いからだ。そのため配属先についても、「中小企業を担当している支店に行きたい」と自ら志願。神田支店では、十年選手の出世コースだった与信担当に二年目で抜擢された。与信担当は夜中まで残業することが多かったが、小嶋代表は仕事が速く十七時には終わっていた。誰よりも早く帰るため「さよならの小嶋さん」というあだ名がつくほどだったというが、空いた時間を利用して、取引先一軒一軒を回ることも日課になっていた。

銀行を退職したのは、一九七三（昭和四十八）年。義父が経営していた両備運輸を常務として再建することになった。岡山を拠点とする両備運輸はトラック、フェリー、タクシー、港湾荷役など幅広い事業を展開していたが、年商四十億で赤字が四億と、売り上げが上がるほど赤字が増える体質になっていた。さらに、同年に起こった石油ショックが経営をより厳しくした。

「再建したくても、どの銀行もお金を貸してくれない状況でした。一番傷ついていたのは、『両備バスの保証をもらってこい』



猫ブームの火付け役となったといわれる和歌山電鐵貴志駅のたま駅長



2010年に建て替えられた貴志駅の駅舎。猫の顔をモチーフとしたデザイン
DESIGNED BY EIJI MITOOKA+DON DESIGN ASSOCIATES

profile

小嶋 光信 (こじま・みつのぶ)
1945年東京都生まれ。慶應義塾大学卒業後、三井銀行（現・三井住友銀行）に入行。73年に義父が経営する両備運輸に入社。99年両備グループ代表。2007年両備運輸と両備バスの合併で両備ホールディングスが誕生したのに伴い、社長に就任。2011年からグループ50社の代表兼CEOを務める。

文：城市 奈那 写真撮影：林田 悟（岡山市在住）



2016年3月にオープンした「岡山ガーデン」。「リョービガーデン」をリニューアルし東部備前地区の観光周遊の拠点として、食事やスポーツ、庭園鑑賞を楽しむ場をつくった。建物の外には、2連式のツリーハウスなど木製の遊具も充実。夢のある社会をつくるのが地域の会社の役割でもある



両備グループ・岡山電気軌道の「MOMO」。レール上面から乗降口までの高さがわずか30cmの超低床電車
DESIGNED BY EIJI MITOOKA+DON DESIGN ASSOCIATES(上・右)



101匹のたま駅長が車体に描かれた「たま電車」

という言葉。親の会社に保証をもらうなんて、再建とはいえない。必死で会社再建案を作り、銀行を回りました」

ある銀行の支店長に会ったとき、「この再建案に書いてあることをあなたは全て実行するのか」と問われた。「全てやります」と答えたところ、「あなたが全てやるなら、お金を出しましょう」という返答だった。その出会いから資金調達の道が開けた。

「あのときその方と出会わなかったら、もし保証をもらっていたら、今日はないと思います」と小嶋代表は回想する。

愕然とした地方の現実

両備運輸の支店を初めて訪れたときのことだ。四千坪の未舗装の土地に、よしずがかげられ、上から水が流れている建物があった。聞けば、トタン屋根を冷やすために、水道管に穴を開けて水を流しているとのこと。このビルが支店だった。

トラック運転手の控え室は、窓のない建物にあった。裸電球が灯された部屋は雑誌が散乱し、中では運転手がぼくちに興じていた。

「これはたまらん」と思った。高度経済成長期の真っ只中、国際都市へと変貌を遂げていた東京で銀行員として勤めていた日々と、地方の現実とのギャップ

もらうこと、唐樋^{からひ}という技術を用いれば洪水は防げること、仮に五十年に一度洪水が起こったとしても、その前の四十九年間で農民は十分な蓄えを得られることを主張し、論戦を制した。

小嶋代表の心を打ったのは、永忠の「治世とは民の苦しみを救うことである」という言葉だった。

「この話を知って、私は猛烈に自分自身が恥ずかしくなりました。それまでいくつかの会社を黒字にし、ある程度貢献できていたと思っていた私は、いかに自分の周辺だけしか考えていなかったかを思い知りました」

もつと社会の役に立つことをしなくてはならない——。永忠の事績を知ったことが、のちの地方公共交通の再生へとつながっていく。

規制緩和で地方交通に危機

二〇〇〇(平成十二)年の鉄道事業法改正と二〇〇二(平成十四)年の道路運送法改正により、それまで路線維持のために給付されていた補助金が圧縮され、数十社に上る地域鉄道とバス、タクシー会社が破綻、事業・路線撤退に追い込まれた。このままでは地方の公共交通は存続し得ないという危機感を募らせた小嶋代表は、それまで専門のコンサルタントもいなかった地域公共

に愕然とした。

「この人たちが胸を張れる仕事にする」と。それが自分の仕事だと腹をくくりました」

とはいえ、東京から来た若者に、運転手たちがすぐに従うことはなかった。運転手教育を始めようとしていたが、「俺たちは国から免許をもらって運転している。おまえにできるものか」と反発を受けた。実は小嶋代表は大学時代、グライダー部に所属し、そこで大型免許を取得していた。これ見よがしに大型トラックを運転したところ、彼らの態度も変わっていった。

一本のホウキが会社を変えた

両備運輸の再建で実行したのは、「中小企業の全国化」だったと小嶋代表は振り返る。まず、全国のどんな会社にも真似できないような、仕事の品質をつくること。さらに東京に進出し、太平洋ベルトに特化して事業を展開した。

会社を変えたのは「一本のホウキ」だった。運転手にホウキを持たせ、積み込みや配達後に荷台を掃除するよう提案した。「両備運輸の運転手はホウキを持っている」と一躍有名になった。当初四十台だったトラックは六百台に増え、両備運輸は三年で黒字になった。「輸送の品質はお客さまには見えないも

交通の研究にいそしんだ。

その結果わかったことは、規模の異なる都市が点在するヨーロッパでは、国や地方公共団体が施設を設置し、民間企業が運営する「公設民営」が一般的で、「民設民営」は世界的に見ても破綻したビジネスモデルであるということだった。モーターゼーションによって、特に大都市では電車やバスの利用者が減り続け、もはや運賃だけでは公共交通が維持できなくなっていた。

公設民営を訴え続けてきた小嶋代表は、二〇〇四(平成十六)年、中部国際空港への海上アクセスについて三重県の津市から相談を受けた。ボランティアで調べたところ、コンサルタントによる需要予測は水増しされており、津市からの路線を含む五路線とも民間では航路維持が難しいという結果だった。唯一、津市からの路線は公設民営方式ならば可能という判断に至り、津市より請われてコンペに参加し、両備グループで津エアポートライン株式会社を設立。空港開業人気と万博効果で予想以上に顧客が増え、この路線を成功に導くことができた。

その直後に舞い込んできたのが、南海電鉄貴志川線の話だった。当時の貴志川線は年間五億円もの赤字を計上し、廃止が発表されていた。しかし、沿線

の。どうやったら品質を認めてもらえるかを考えた末に生まれたアイデアですね」

津田永忠に学ぶ

グループ会社の代表をいくつか務めた後、一九八五(昭和六十)年に岡山青年会議所の理事長、一九九六(平成八)年に岡山経済同友会代表幹事を歴任し、地域との関わりを深めていった。その中で、小嶋代表の生き方を変えた出来事があった。江戸時代に岡山藩の郡代を務めた津田永忠^{ながた}の存在を知ったことだ。

津田永忠は、岡山藩主池田光政、綱政に仕え、後樂園や閑谷学校をつくった人物である。一六七五(延宝三)年に岡山で大飢饉が起こったとき、閑谷学校の御用米を使い、郡中にある手習所を施粥所^{せきじやく}にすることを進言した。「民が飢えるときになんぞ学問を」という永忠に、勉強嫌いで遊び好きといわれた綱政はいたく感心し、郡代に起用し、財政改革を任せた。

永忠は、二千五百町歩もの大干拓を実現したことで知られる。大干拓をめぐっては、陽明学者の熊沢蕃山^{くまざわはんざん}と真向から対立した。「河口に大干拓をすれば洪水を招く。さらに財政難の藩には資金がない」と言う蕃山に対し、資金は個人で京や大坂の商人に用立てして

住民による「貴志川線の未来をつくる会」が熱心で、なんとか路線を存続できないかと運動を続けていた。

そこで小嶋代表は、公設民営にすること、運営会社は第三セクターではなく100%単独出資とすること、利便向上策を鉄道会社内の運営委員会ではかることを中心に、五億円の赤字を年八千二百万円以内にするスキームを受け、一部公設民営にて、岡山電気軌道が100%出資をして和歌山電鐵を設立し、運営を担うことになった。両備グループのデザイン顧問を務めている、車両デザイナー水戸岡鋭治氏によるいちご電車やおもちゃ電車、たま駅長の人気によって、和歌山電鐵貴志川線は海外からも観光客が訪れるまでになった。

その後も、中国バスや井笠鉄道などの再生を引き受け、いつしか「地方交通の再生請負人」と呼ばれるようになった。「その土地に腰を据え、地域を支える仕事をすることが経済人の役割」と小嶋代表は語る。

両備グループの経営理念は、真心からの思いやりを意味する「忠恕^{ちゆうじよ}」である。そして、もう一つ、小嶋代表が津田永忠に学んだ大切な言葉が「知行合一^{ちゆうぎょういつ}」だ。良いと思ったことはやりなさい——。その思いが、風前の灯火の地方交通に向かう気持ちを駆り立てている。

独自の管理方式を用い、従業員一丸で 生産性向上に励むカワトP.C.

《山口県岩国市》

マンションやホテルなど住宅関連施設の給水給湯用配管システムにおいて、樹脂製パイプによる画期的なプレハブ配管品を開発。各グループの目標を「見える化」し、柔軟な雇用制度を設けて女性が働きやすい環境を整備するなど、ダイバーシティ経営でも全国から注目されている。

都心マンションシエア三割の プレハブ配管システム

岩国市に本社を構える株式会社カワトP.C.は、一九八九（平成元）年に鉄加工品を製造する有限会社川戸鉄工として創業した。数年後から樹脂加工品も手掛けるようになり、二〇一四（平成二十六）年に現在の社名に変更した。

樹脂製パイプによる給水給湯用配管システムを開発したのは、一九九五（平成七）年ごろ。それまでの配管工事は、職人による現場作業が一般的だったため、事前に工場で製造した配管キットを現場で設置する工法は画期的だった。建設コストの削減につながるこの工法はすぐに普及し、現在

では都心の高層マンション向け製品のシエア三割を同社が占めている。

このシステムが生まれたのは、自分たちで動き回り、「お客さまは何を必要としているか」を徹底的に調べた結果だ。創業当初、大手総合化学メーカーの委託で樹脂の小さな部品を製造していたが、このままでは売り上げが伸びないと判断。ならば、自分たちで売っていかないと、独自に販路を開拓していった。

大手メーカーから製造を受託する中で、活路が見いだせそうだと感じていたのがマンション、ホテル、病院など住宅・生活関連施設だった。建設計画は、開発事業者のデベロッパー、設計を担当する設計会社、施工を取りまとめるゼネコン、それぞれの施工工

も不良品が出ないように、品質を徹底的に管理。現在、年間約六万世帯分の配管システムを製造している。給水・給湯プレハブ配管システムの他にも、スプリンクラー止水栓一体型ワンタッチ継手、メータボックスユニットなど、技術を生かして他の製品・サービスも展開しており、今後はさらに市場シェアを拡大していきたいという。

グループで利益率を管理 一人一人が効率性を意識

さまざまなニーズに応える製品を企画しているのが、三十三人の女性からなる企画部である。同社は製造業ながら、樹脂加工事業部の約八割を女性が占めており、その独自の生産方式でも注目されている。

パイプの組立工場には工場長をはじめ管理職は存在せず、従業員約百三十人は四〜五人のグループに分かれ、作業計画の立案から配管の加工、組立、梱包、検査などをすべてグループ内でこなす。作業履歴はタブレットで記録する。管理に対する強い意識が保たれている秘訣は、独自の「利益率管理表」だ。グループ全員の総作業時間、加工代、平均賃金などを基に、それぞれのグループが一日でどれだけ利益を生み出したのかが一目

でわかる仕組みを作っている。自分たちの仕事を早く終わらせて他のグループを手伝うことでも収入が得られる。さらに、会社が定める月間目標利益をグループでクリアすれば、給料の十〜十五%の手当がつく。総務、人事、経理といった部門でも同様に利益率管理表が使用されており、どうやったら自分の業務の利益を上げられるかをすべての従業員が考えるようになっていく。

「家事や子どもの世話など、家に帰ってからやるべきことが多い女性ほど、時間をうまくやりくりしながら、しっかり仕事を終わっている印象がありますね」と村田典子副社長は話す。村田副社長は、二十年以上前に一日三時間のパートとして入社した。樹脂製パイプを開発したときの企画部の一人でもある。

「どこでもやっているような仕事ではなかったもので、やりがいがありました。家族にばれないように、夜、布団をかぶって図面を描いていたこともありましたね。CADで図面を描くことに戻込みする女性社員に、「この仕事が女性にできたらすごいよね」と褒めつけると、みんなやる気になってくれますよ」

三年までの育休や記念日休暇など

事を担当するサブコンや職人と、階層構造になっている。同社が直接販売するのは、サブコンや職人であるが、それ以外のデベロッパーやゼネコンなどにも訪問し、彼らが求める品質、管理、コストなどの基準を聞いて回った。「今思えば非効率的な営業ですが、地方企業に興味を持ってもらうには、

今までにない発想の製品や売り方を生み出していないといけないんです」と川戸俊彦社長は振り返る。

水漏れ防止、品質管理、職人不足の解消など、建設工事に関連するさまざまな要望をスマートに解決したのが、同社の樹脂製配管キットであった。パイプと継手の接続には、施工性の良い電気融着方式を採用した。「うちの製品は絶対に水漏れが起らないし、紫外線さえあたらなければ躯体より耐用年数がある」と川戸社長は自信を見せる。また、何千個に一個で



女性が働きやすい雇用制度の整備を進めており、将来保育園を社内につくることが村田副社長の夢だという。同社は二十年以上にわたって地元的女性を雇用し続け、二〇二五（平成二十七）年度には経済産業省の「新・ダイバーシティ経営企業100選」に選ばれた。

時代に合わせて常に新しいことに挑戦することが大切と語る川戸社長は、今の日本の製造業に危機感を募らせる。「製造業は一度安価な海外に流出してしまつたら、戻ってくることはありません。製造や人材が海外に流失してしまう前に、地方でも十分できるんだと示さないといけないのです」



1袋分がマンション1戸分



分岐工法敷設状態
写真提供：株式会社カワトP.C.



電気融着でパイプと継手を接続



33人の女性からなる企画部



カワトP.C.本社外観



村田典子副社長と川戸俊彦社長

伝統的な技法にこだわりながら

新しい長浜人形を創作する土人形作家 福美さん

日本画を学んだ後、キャラクター商品を製作する会社でぬいぐるみのデザインを担当。移住した浜田で伝統工芸の長浜人形に出合い、かわいらしいポーズの招き猫など、新しい長浜人形を創作している。



profile

福美 (ふくみ)

1968年神奈川県横浜市生まれ。92年多摩美術大学日本画科卒業。株式会社ナカジマコーポレーションでぬいぐるみのデザインを担当。99年、第1子出産を機に夫の実家がある島根県に移住。2005年長浜人形の伝統工芸士安東三郎氏に師事。

文：藤沢 享乃 (広島市在住) 写真撮影：高野 淳 (島根県津和野町在住)

愛くるしい表情の 土人形の招き猫

手招きしながら、もう一方の手で鯛を担ぎ、ぬいぐるみのような愛くるしい表情をした猫。はたまた、いちごやレモンを頭にかぶった猫。そんな招き猫をはじめとした人形を制作しているのが「島根の招き猫工房」を営む土人形作家の福美さんだ。

土をこねる作業から泥絵の具での彩色まですべて一人で行っているため、どれ一つとっても同じものはない。福美さんの口癖は「この子はね……」。彼女にとっては一つの作品というよりも、どれもが「わが子」なのである。

取材の途中、工房に小学生の娘さんがやってきた。娘さんへのまなざしや口調は人形に対する態度と同じで、やはりここは工房というよりも、福美さ



お子さんもふらっと立ち寄る工房

んがわが子を大切に育てる場所なのだとあらためて感じた。

福美さんの人形は、一見、現代の人形作家が独自の感性で生み出した新しい人形のようなのだが、実は島根の伝統工芸・長浜人形である。城下町だった浜田市長浜では良質な粘土が採れたため、かつては焼き物づくりが盛んに行われた。長浜を中心に島根県西部では、三月の節句に天神の人形を飾ったり、子どもの健やかな成長を願う供物や病氣平癒のお礼として、神社に長浜人形を奉納する風習があった。また、玄関などに人形を飾る家もあったという。高価な雛人形や武者人形には手が届かなくても、家族に対する愛情は同じ。長浜人形は庶民にとって、とても身近な存在だったのだ。

しかし、長浜人形を飾る風習も、時代とともに失われていった。福美さんの招き猫は、人形に込められた人々の思いを大切にしながら、現代風によりみえつつ長浜人形といえる。

ぬいぐるみや人形は 愛情を伝える幸せのツール

福美さんは、横浜生まれの横浜育ち。いわゆる都会っ子だ。多摩美術大学日本画科を卒業後、スヌーピーやディズニーキャラクター、サンリオキャラクター

ター商品を製作するナカジマコーポレーションに就職し、ぬいぐるみのデザインを担当した。就職したきっかけは、のちに上司となる人が講師を務める東京おもちゃ美術館で講座を受けたことだった。その中で聞いた「おもちゃは贈る子どもの笑顔を想像して買う夢のある商品」「その子への愛を伝えるために買う、愛情のコミュニケーションツール」という言葉に共感した。「なんと夢のある仕事なんだろう！ぜひこの人と一緒に仕事がしたい」と思い、迷わずその会社に就職した。

「みんなでアイデアを持ち寄り、ディスカッションしながら最終的な方針を決めるのですが、自由にのびのびと仕事をさせてくれる会社で、とにかく楽しくて仕方ありませんでした。ニット生地のかまのプーさんや、キャラクターをベアにしたベアシリーズ、『ぬいぐるみは子どものもの』という常識をあえて打ち破った大人の女性向けインテリアぬいぐるみなど、さまざまな商品を開発しました」

子育てのため 夫の故郷の浜田へ移住

大好きな仕事に没頭していた福美さんに転機が訪れる。出産を機に、夫の故郷の浜田市にUターンすることに

なったのだ。夫はかねて「浜田で子育てをしたい」と話していたが、福美さんにとってはまだ結婚して二年目で、突然という思いはぬぐえなかった。何より残念だったのは大好きな仕事をやめなくてはならないことだった。「移住が嫌だとは思いませんでしたが、大好きな仕事ができなくなるのが一番つらかったです」と福美さんは振り返る。

浜田に移住してからもデザイン画を描く仕事などを請け負っていたが、しばらくするとデザインもデジタル化が進み、コンピュータで描くのが当たり前になった。

「高価な機器を個人で揃えるのは難しかったため、デザインの仕事もやめました」

大好きな会社とのつながりもここで断ち切れてしまった。「でも夫の言う通り、浜田は子育てに最適な場所でした。空間や時間の余裕があるから、じっくりと子どもと向き合えます。都会では味わえない子どもとの濃密な時間を過ごせることは一番の喜びでした」

母としては満足していたものの、制作者としてのキャリアが途切れてしまった喪失感が心のどこかにあったのだろう。もともと創作が好きで性格のためか、浜田で天然酵母のパンや味噌

和紙づくりを習ったり、家族のために刺繍や小物づくりに励んだり、暮らしに身近なモノづくりに熱中した。「それはそれでとても充実していたのですが……」。物足りなさがどこかにくすぶっていた。

伝統工芸士・安東三郎氏との運命的な出会い

子育てをしながら、創作への渴望を抱えていた福美さんを長浜人形に導いたのは公民館主催の神楽面づくりの市民講座だった。

「きっかけは保育園に通っていた長男でした。保育園で神楽の太鼓を叩いて喜んだ息子が『行きたい』といったのです」。型を用いて粘土を造形する工程から、粘土を砕いて素地を作り出す「脱



泥絵の具を溶き、丁寧に絵付け

活」という石見神楽の神楽面独自の技法は長浜人形から生まれた。そのため、石見神楽の神楽面は人形師が作るのが一般的だ。そのとき講師を務めた安東三郎氏もその一人で、本来は長浜人形の伝統工芸士だが、講座で神楽面の作り方も教えていた。昔から屏風や掛け軸など、日本古来の芸術や伝統工芸に興味を持ち、日本画を学んだ福美さんにとっては、まさに運命的な出会いだった。そんな福美さんを見て「長浜人形をつくってみる？」と誘ってくれたのが安東氏だった。福美さんは安東氏に弟子入りし、長浜人形の技術を日々学んでいった。そして、「一人前」のお墨付きをもらい、土人形作家として独立する。土人形の長浜人形は、焼きや絵付け以外の下準備に大変な手間がかかる。そのため、夫婦で協力して制作するケースが多い。たいてい女性が下準備を担当するため、人形師となるのは男



さまざまなポーズの招き猫を提案



粘土をこねる作業から彩色まですべての工程を1人でこなす

性ばかり。大変珍しい、女性人形師の誕生となった。

今の人が欲しいと思える新たなモチーフを模索

土人形作家として独立した当初は、「人形を誰かにプレゼントできるだけで幸せでした」と振り返る。しかし、続けていくには買ってもらうことが重要で、また作家として、精魂込めた作品の評価には「ありがたう」の言葉だけでなく、お金も必要だという矜持もあつた。そこで立ち上げたのがネットショップだ。

当初は天神や金太郎、雛人形など伝統的な人形をつくっていたが、あまり売れなかったため、方向転換。今の人が欲しいと思える新たなモチーフをリサーチした結果、招き猫が良さそうだと判断に至った。作家としてつくりたいものをつくるだけではなく、みんなに手に取ってもらえるものをつ

くろうというバランス感覚は、ぬいぐるみをデザインしていたときに培われたのだろう。新しいタイプの招き猫を制作するようになって徐々に

に人気が高まってきた。

人形の表情には、その時の福美さんの気持ちがダイレクトに反映されるといふ。そのため、人形制作では何よりも自分自身が楽しい気分、でいることを大切にしている。

「精密な人形づくりを良しとする作家もいますが、人形ごとに少々目の大きさや模様が違っていても、見る人が楽しく前向きな気分になれるなら、私はそれでOKだと考えています」

福美さんの人形に対する姿勢は明快だ。長浜人形の伝統技法はしっかりと守りつつ、一方で、デザインや表情などは、「かわいい」「楽しい」と思えるなら良しとする。手づくりのため、なかなか数をこなすことが難しいのが現在の課題だ。より多くの人に土人形の温かみを知ってもらうため、今後、今よりもさらに精力的に制作者人形の数を増やしていくのが目標だという。

藤沢 享乃(ふじさわゆきの)
鹿児島生まれ。ライター、よつば編集広告事務所代表。大学を卒業後、出版社を経て広島県でフリーライターに。現在は、ライター仲間と設立したよつば編集広告事務所を拠点に、地域に根ざした記事を執筆している。

11 二つの名酒二つの一品



《山口県宇部市》

純米吟醸山田錦50 貴

あじの南蛮漬け



2001年に立ち上げた「貴」

株式会社永山本家酒造場

創業 1888(明治21)年
山口県宇部市大字車地138
TEL 0836-62-0088
http://www.domainetaka.com
年間生産量 1,200石(216kℓ/12万升)



桂木山を水源に秋吉台を南北に流れる厚東川。周防灘に注ぐその川のほとりに立つのが永山本家酒造場である。カルシウムを多く含んだ中硬水は、輪郭のある辛口の酒造りに向く。そのため創業来の銘柄「男山」では、きりつとした力強い酒のスタイルを貫いてきた。「宇部はもともと炭鉱で栄えたまち。そこで働く人たちの癒やしにの酒に、辛口が似合っていたのだと思います」と五代目の永山貴博社長は語る。刺身に濃いめの甘口醤油をつけ、辛口の酒をぐいっと飲むのが、この辺りの特色だという。

そして今、「男山」と並ぶもう一つの銘柄が人気を博している。永山社長が熱い思いが込められた「貴」だ。永山社長が醸造研究所で学んできたところ、職人杜氏が代わって蔵元自らが酒造りをする時代が到来した。その先駆けとなったのが、山形県村山市・高木酒造の「十四代」だ。蔵の子息でも杜氏に劣ることのない酒造りができるという事実は、大きな刺激となった。「いつか自分の名をつけた酒を造り、世に問うてみたい」。そう思いな

がら、杜氏の下で学び、二〇〇一(平成十三年)年に新しい純米酒ブランド「貴」を立ち上げた。今回紹介する名酒は、純米吟醸山田錦50「貴」。自社栽培の山田錦を使い、口に含むと、みずみずしい新米のよう優しい香りが広がる。中硬水を生かした酒の輪郭や酸味も特徴だ。ドライな仕上げのため、食事とともに冷酒で味わうのがお薦めという。その名酒と一緒に味わいたい一品が「あじの南蛮漬け」だ。他に瀬戸内の青魚、白身魚を使ったマリネやカルパッチョとも相性がいい。

「貴」は、宇部市自慢の物産品を認証する「うべ元気ブランド」で唯一ゴールドに認証された。丁寧な管理、高品質を守りながら、今後は海外の人にもお酒を届けたいと永山社長は目を輝かせる。「われわれがフランスのワイン生産者の元を訪れるように、外国人に貴の蔵に行きたいと言ってもらえる時代をつくりたい。わが国には日本酒という素晴らしい醸造酒があると胸を張れるような酒造りを続けていきたいですね」

松田正平

[1913-2004]

犬馬難鬼魅易

白洲次郎・正子夫妻の旧邸宅、武相荘の玄関の柱には、「犬馬難鬼魅易」と書かれた短冊が掛けられている。この書はもともと美術批評家、洲之内徹の現代画廊にあったものだが、白洲正子によれば「前から欲しかったので半ば略奪してきた」とのこと。

もちろん、本当に略奪してきたわけではないだろうが、鬼や魑魅魍魎といった奇抜なものを描くのはかえって易しく、犬や馬などありふれたものを描くことこそ難しいという言葉の意味と、趣のある自由自在な筆の走りとの合点が、彼女の美意識を強く刺激したのである。この洒落な書の作者は洋画家の松田正平。一部の美術ファンを除いては、長く「知る人ぞ知る」画家だった。

戦前のパリへ

一九二三（大正二）年、現在の島根

県津和野町に生まれた久保田正平は、七歳の時に宇部（山口県）の松田家に養子として引き取られた。宇部中学校を卒業後、東京美術学校を受験するも失敗。二浪後、同校西洋画科に入学し、藤島武二教室に学んだ。一学年以上には、同じ山口から上京してきた香月泰男がいた。

一九三七（昭和十二）年、二十四歳

で東京美術学校を卒業した松田は、同年十月、パリに向けて出発する。宇部の有力者たちの支援を受けての留学だった。約二年間のパリ滞在では、現地の美術学校に通う傍らルーヴル美術館で模写をしたり、フランス内外を旅行したりと充実した時間を過ごしたようである。パリ時代の作品からは情熱に満ちた、生真面目な若い画家の姿が透けて見える。

戦後の模索

第二次世界大戦の勃発を受けて帰

国した松田は、実家の宇部で終戦を迎え、戦後は山口県光市で教員をしながら制作を続けた。このころに描き始めたバラや瀬戸内海に浮かぶ祝島の風景は、生涯を通して松田が取り組むテーマとなった。

しかし、若手の画家として地方を拠点に活動をするに、やがて松田は限界を感じるようになったのだから。一九五三（昭和二十八）年、教職を辞し、妻子を連れて上京する。その後、絵画教室の講師や雑誌の表紙絵などの仕事を受けながら制作を続けたが、画家としての評価は思うようには得られなかった。同じころ、同郷の香月泰男はシベリア・シリーズで戦後洋画を代表する画家の一人になっている。東京美術学校卒業後、故郷の期待を背に新進気鋭の画家としてパリに旅立った松田と、留学の願い叶わず、知人もいない北海道で孤独な生活を送った香月の立ち位置は、太平洋戦争を挟んで真逆になっていた。

遅咲きの画家

松田正平が人々に広く知られるようになったのは、一九七〇年代も後半のこと。画家はすでに還暦を過ぎていた。晩年の松田の評価に欠かすことができない人物が、同い年で誕生日も一日違



洲之内徹(奥)と松田正平(手前) 1980-85年ごろ

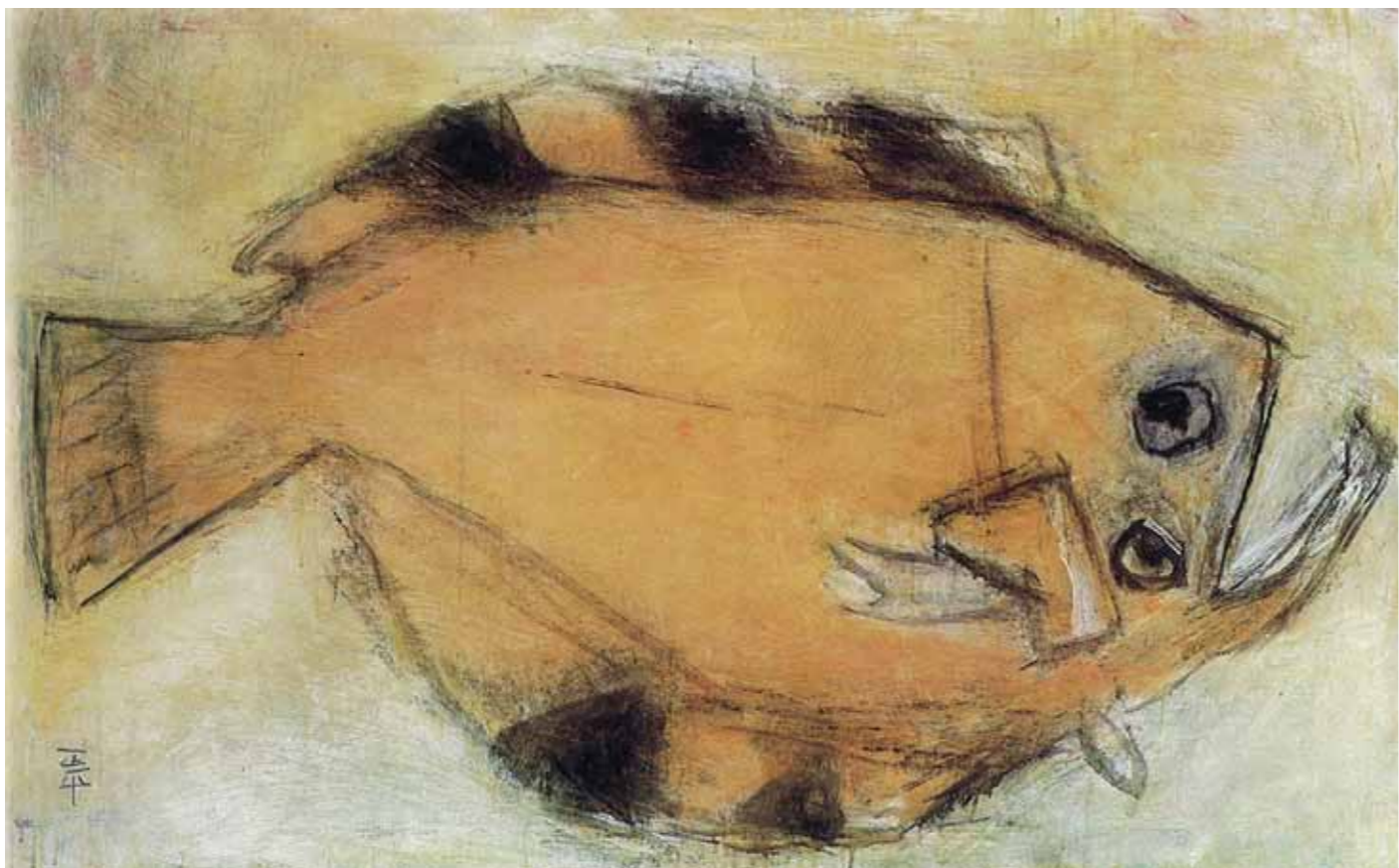
は、すでに戦後の模索期に出揃っている。一方で、その描き方は一九七〇年代後半に大きく変わっていった。それまで厚塗りだった絵の具は少しずつ薄

くなり、やがて透明感あふれる画面へと変貌を遂げる。

晩年の松田独特のマチエールは、薄い絵の具を塗り重ね、使い古しの剃刀でゴリゴリとカンヴァスを引っ掻くように絵の具を削る作業を繰り返すことによって徐々に立ち現れてくる。鮮烈なほど繊細な表現は、画家としての評価をなかなか得られない中でも、ストイックに油絵に挑み続けた戦後から二十年以上にわたる試行錯誤の果てにたどり着いたものだった。

身のまわりの平凡なモチーフを「描ききる」ことの難しさを誰よりも知っていた松田正平。「祝島を描き出してもう三十年経つ、いまだによく描けんけどね」。そう語った松田の透明感あふれる画面は、開放的で清々しく、上品なユーモアとおおらかな厳しさを、そしてどこか懐かしさを感じさせる。

(文・萬屋健司)



《オホイウ(大きな魚)》 1984年 油彩/カンヴァス 山口県立美術館蔵



《コロ-「真珠の女」模写》 1938年 油彩/カンヴァス 個人蔵



《周防灘(祝島)》 1980年 油彩/カンヴァス 山口県立美術館蔵



《バラ(時計)》 1986年 油彩/カンヴァス 個人蔵

萬屋 健司(よろずや・けんじ)

1979年長崎県生まれ。2009年より山口県立美術館勤務。「生誕100年香月泰男―追憶のシベリア」(2011年)、「生誕100年松田正平―悠久の周防灘」(2013年)等の展覧会を企画。専門は北欧近代美術史。

透明なマチエール

松田正平が描くモチーフは、初期から晩年までほとんど変わっていない。代表作とされる周防灘の風景やバラ、瀬戸内海の魚など、高く評価された晩年の作品に描かれている主題

きのえ温泉

《広島県大崎上島町》

海沿いの高台にあり、空と海が目の前に広がる、絶景のきのえ温泉。その誕生には観光業にかけた島の人々の思いがあった。



空と海を独り占めしたような眺め 写真提供：ホテル清風館

一町の施策から生まれた温泉

広島県沿岸部中央に位置する竹原港からフェリーに乗って三十分、穏やかな瀬戸内の短い船旅を楽しんで降り立ったのが大崎上島である。ここは、橋のかかっていない島。広島県が観光PRとして打ち出した秘境巡りの地に選ばれたほか、映画『東京家族』のロケ地としても脚光を浴びている。

とはいえ、歴史好きの人ならば、大崎上島といえば瀬戸内海航路の風待ち潮待ちの島という印象が強いだろう。鎌倉時代中期の二二三（建長五）年十月二十一日の「近衛家所領目録」にその名が登場しており、当時、すでに京都にもその名が知られていたほどだ。

きのえ温泉の名は、古い町並みが残る地区、木江に由来する。弱放射能・カルシウム・ナトリウムを含む塩化物冷鉱泉（海水は含んでいない）で、神経痛、関節痛、慢性消化器病、痛風などに効能があるとされる。

歴史ある島の温泉となれば、さぞかし古くからの温泉であろうと想像して寄っている。開館当時は団体客が多かったが、今では個人客が多くなっているという。インターネットで「島、温泉」といったキーワード検索で見つけたからと予約してくる客も多くなってきたそうだ。

清風館では、大崎上島の良さを観光客にアピールするため、温泉だけでなく食材にもこだわっている。毎朝契約している漁師から直接新鮮な魚を届けもらうほか、地元農家から野菜、かんきつ類を仕入れ、地産の食材を生かした料理を提供している。

「六つの日本」や祭り
知られざる観光資源の宝庫

大崎上島町には「六つの日本」があるという。①神峰山から見える島の数（百十五）、②契島の東邦亜鉛工場の鉛生産量（約十万吨）、③大正六年建築の木造五階建ての民家、④島特産ブルーベリーのアントシアニン含有量、⑤木江ターミナルが貯蔵するメタノール



木造3階建ての木江の古い町並み



観光用電気自動車モビリティ



きのえ温泉源泉



木造5階建ての民家

瀬戸内海の多島美を
堪能できる醍醐味

だろうか？それが「きのえ温泉・ホテル清風館」だった。

海沿いの高台という絶好のロケーションに立つホテル清風館は、まさに島の温泉を満喫できる場所である。「瀬戸内の空と海の間にあるホテル」の

キャッチコピー通り、はるか下方に海を眺めることができ、上を見上げれば、青い空がどこまでも続く。圧巻なのは露天風呂からの眺めで、目の前には瀬戸内海の島々が広がり、船が行き交う。まるで空と海を独り占めたかのような錯覚に襲われる。ホテルの人によると、夜、ここで風呂につかると、月と船の光だけがほのかに見え、名曲『月の沙漠』のような静寂の世界を味わえるという。

実は清風館の前身は国民宿舎だった。温泉の発見と同じころ、老朽化や経営難を理由に廃止が決まっていた

が、町はなんとかこの大きな宿を残したいと思い、民間の船会社に協力を求めた。こうして、フェリー航行を営む会社とタッグを組んで、大崎上島を「観光の島」にするための試みが始まったのである。民間会社ならではのアイデアを加えてホテルとして建て替え、きのえ温泉のシンボルに生まれ変わった。

現在、大崎上島の来島者の半分以上は清風館に立ち



作図：小学館クリエイティブ

浄土寺本堂・多宝塔

《広島県尾道市》

山陽道の名刹・浄土寺は、六一六（推古天皇二十四）年、聖徳太子の開基と伝わる。西大寺の定証上人が西国教化の道すがら浄土寺末の曼荼羅堂（現・海龍寺）に安居していたころの浄土寺は、堂塔を守る人さえいない状態であった。そこで上人は浄土寺の再興を発願し、尾道浦の大檀那光阿弥陀仏らの援助によって一三〇三

（嘉元元）年から一三〇六年にかけて堂塔が造営された。その二十年後に火災という悲運に見舞われるが、尾道の邑老道蓮、道性夫妻らによって、数年後に堂塔が徐々に再建されていった。一三二七（嘉暦二）年に大工藤原友国、国貞によって建築された本堂は、和様を基調としながらも唐様、天竺様を混用した折衷様式で、前面二間通りを外陣、後ろを内陣とする密教式平面を持つ。

多宝塔は、一三二八（嘉暦三）年に建立され、牡丹や唐草に蝶の透かし彫りをした墓股など華麗な装飾に富んでおり、鎌倉時代末期を代表する建築といわれる。

二〇一六（平成二十八）年、浄土寺は開創千四百年および平成の大修理完成を迎えた。現在、十一月二十日までの予定で重要文化財の秘仏「十二面観世音菩薩」の御開帳を行っている。



左から本堂、重要文化財の阿弥陀堂、多宝塔



浄土寺本堂



多宝塔

写真提供：尾道観光協会



©「碧い風」VOL.88 2016年11月1日発行

発行人：増矢 学 編集人：城市 奈那

●企画・発行：中国電力株式会社 エネルギア総合研究所（広島オフィス）

〒730-8701 広島市中区小町4-33 ☎082(544)8150

[ホームページアドレス] <http://www.energia.co.jp/>

●編集・制作：株式会社ジェイクリイト

〒101-0051 千代田区神田神保町2-14 朝日神保町プラザ204 ☎03(5212)3981